

認知言語学

長谷部 陽一郎

近年の認知言語学ではコーパスからのデータや高度な統計的手法を活用した量的研究の占める割合が向上している。L. Jandaによる2013年の報告によると、専門学術誌*Cognitive Linguistics*において1990年から2007年までは、量的データは2割から4割以下の論文で扱われるに過ぎなかったのに対し、2008年以降は常に半数以上の論文が何らかの定量的分析を含むようになってきている。要因の1つは、認知言語学における基礎的な理論研究がある種の安定状態に達し、新たな貢献を行うために、より高い実証性が求められるようになったことであろう。しかし量的データ重視の傾向が高まる一方で見逃せないのは、「表現」としての言語への姿勢を重視した研究の潮流も今まで以上に存在感を高めている事実である。これは従来取り上げられてこなかった種類のテキストにも認知言語学的なアプローチを適用するという方向性であり、最近出版された以下の英語文献2点に象徴的に示されている。

最初に紹介するのはB. DancygierとE. Sweetserによる*Figurative Language* (2014, Cambridge UP) である。本書は1980年代からの認知言語学における比喩表現研究の系譜につながる解説書であるが、これまでの類書とは異なる特徴を持つ。概念メタファー理論、メンタル・スペース理論、ブレンディング理論といった基本的枠組に関する章に加えて、構文パターンに観察される比喩性、フ

レーム概念の多言語間での相違、文学作品や科学的文章といったジャンル別テキストにおける比喩的意味の発現といった内容に個別の章が割かれており、認知言語学における比喩研究の最先端に触れ、今後の課題領域を概観することができる。

次に紹介するのはC. Harrison, et al.による論文集*Cognitive Grammar in Literature* (2014, John Benjamins) である。本書には文学研究の様々な側面に対しR. W. Langackerが提唱する認知文法理論の道具立てを用いてアプローチした14編の論文が収録されている。しばしば誤解される事実であるが、必ずしも「認知文法＝認知言語学」ではない。認知文法はLangackerによる体系的な文法理論の名称であり、他の理論と多くの部分で共通しつつも、内部で首尾一貫した体系を持つことを目指した独自の理論である。编者らによると、言語理論の文学研究への応用は古くから目指されてきたが、実質的な成果を生み出してこなかった。その背景には同じ用語群を用いて定義される理論的基盤が研究者間で共有されていなかったことがある。この意味において、Langackerによる道具立てを用いた文学研究の可能性を探るといふ本書の目的は明確である。Langacker自身による本書の前文でも述べられている通り、あらゆる言語表現は単位や規模の大小に関わらず「形式と意味との記号関係」の元に成立する。このことを踏まえ、本書の試みは最もマクロなレベルにおける言語表現の理解に対し貴重な貢献を為し得るものと評価できるだろう。

(同志社大学)